

資料

靈魂觀念と墓参・お供え^{1,2}

—大切な人と死別した遺族を対象とする調査—

白岩 祐子 埼玉県立大学

**The image of the soul and the memorial services
-from a survey of bereaved family who have lost a loved one-**

Yuko SHIRAIWA (Saitama Prefectural University)

This study examined (1) the relationship among the bereaved family's images of the deceased's soul ("Reikonkannen"), the frequency of memorial services ("Kuyou"), which includes visiting the grave ("Bosan"), and the offering of food and flowers ("Osonae"), and (2) the potential mediating effect of the perception that "the deceased needs memorial services." A total of 283 individuals (163men and 120 women; mean age=58.98 years, SD= 17.15) who were registered with a research company participated in an online survey. The results of the mediation analysis confirmed that the acceptance of images of the deceased's soul influenced both the frequency of memorial services and the offering of food and flowers through the perceived need for memorial services, suggesting that people's behavior is defined by their image of the deceased's soul. As a future consideration, the study proposes examining the impact of the image of the deceased's soul and the engagement in memorial services on the mental health and well-being of bereaved family members.

亡き人の墓地を訪れたり、仏前・遺影に花や飲食物を供えたりするのは多くの人にとって日常的な営みである (相澤, 2016; 波平, 1990a)。本研究では、こうした行為の規定因として靈魂觀念に着目し、この觀念が墓参やお供えをもたらす過程を検証する。

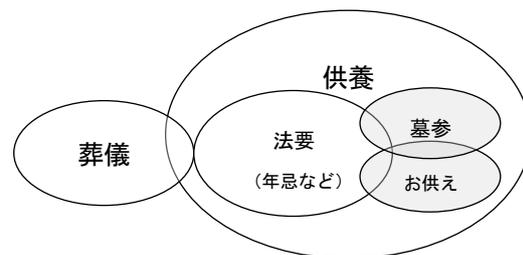
墓参・お供え

故人に向けた遺族の行為は「葬儀」と「供養」に大別される。葬儀は主として、故人との別れ、故人の身体の処置、そして故人の冥福を祈ることに関連した、基本的には一回性の手続きと儀礼である。これに対して供養とは、故人の冥福を祈ることに特化した反復的な行為である。これら葬儀と供養を総称して、文化人類学者の波平 (2004) は「死者儀礼」と呼ぶ (Figure1)。死者儀礼のうち供養はもともと仏教行事であり (藤井, 2005)、その語源は「供給資養」にあるとされる (新谷, 2009)。すなわち、故人が必要としている飲食物や衣服などを供え (供給し)、ま

た仏教の経典を読経することで故人を資養する行為が供養である (新谷, 1992)。典型的な供養としては、年忌に代表される「法要」を挙げることができる (田中, 2005)。法要は、初七日や四十九日に始まり最長で五十回忌 (宗派によっては百回忌) まで行われる。

「墓参」や「お供え」という私的かつ日常的な行為も供養の一環である。このうち墓参は、故人の墓を訪れて、飲食物や花、燈明・線香や言葉をささげる行為である (小松, 2005)。墓参は一般的に、春秋の彼岸、盆、命日など特定の

Figure 1 死者儀礼の構成要素



1 本研究は JSPS 科研費 JP17K04310, JP20K14126 の助成を受けた。

2 Corresponding author at: Yuko SHIRAIWA (E-mail: shiraiwa-yuko[at]spsu.ac.jp)

時期に行うものとされるが、それ以外のタイミングでもしばしば行われることがある。またお供えは、神や死者に金銭、飲食物、花などをささげる行為の総称である。対死者に限定した場合、お供えは墓前と自宅（仏壇や遺影など）で行われるのが一般的だろう³。

以上を小括すると、故人の冥福を祈るために繰り返される儀礼・行為を供養といい、主として法要、墓参、お供えから構成される。このうち本研究は以下の理由にもとづき墓参とお供えに着目する。法要を行うか否か、どの程度しげく長く行うかは、故人の生前の社会的地位、遺族の経済力、慣習、地域性、菩提寺の有無や宗派など、故人と遺族の属性や環境要因に左右されやすい（岩田, 2018）。これに対して墓参やお供えは、そうした影響を比較的受けにくい反面、遺族の故人に対する心情・心象など内面が反映されやすいと考えられる。以上の理由から本研究は墓参とお供えに焦点化し、その生起要因と過程を検討する。

霊魂・霊魂観念

折にふれて墓参したり、仏壇・遺影にお供えして手をあわせたりするのは、時間・労力・費用をそれなりに要する行為である。そうした行為を人びとはなぜ行うのだろうか。これらの行為は単なる習慣以上の意味を持つのだろうか。

波平 (2004) は、遺族が死者儀礼を行うのは霊魂観念のためだと指摘する。「霊魂」とは、当人が存命中は身体のうちであり、亡くなるとそこから離脱する、通常は不可視の存在である（堀江, 2015）。亡くなった人の霊魂は、その人の生前の記憶や意識を保つと考えられている（佐藤, 2008）。いわば「肉体を伴わない故人その人」が霊魂とっていいだろう。こうした霊魂の存在と特徴について人びとが抱く信仰⁴は、霊魂観念と呼ばれている（渡部・金児, 2004）。この霊魂観念ゆえに遺族は葬儀や供養を行う、というのが波平 (2004) の立場である。

「冥福」という言葉が死後の幸福を意味する通り、霊魂というのは幸せにも不幸にもなりうる存在である。生きてるときと違うのは、死

後の幸不幸が、故人の努力ではなく遺族の努力、すなわち死者儀礼に規定されると考えられていることである（波平, 1990a）。故人が置かれているかもしれない不快な状況、欠乏の原因を取り除き、故人を満ち足りた状態にすることを人びとは遺族の義務だと信じている（波平, 1990b）。前掲のように、供養が元来、故人の必要としている事物を提供する行為であることに照らせば、遺族は亡き人の霊魂を想定しているからこそ、その幸福や安寧を願って供養するのだという上記の指摘は至当であるように思われる。

一方で、こうした理解は現代の日本には当てはまらないとする向きもある。日本史学者の佐藤 (2008) によれば、現代に生きる日本人はもはや霊魂観念を受容していない。人びとが他界浄土への往生を願った「中世」、家単位の墓制が一般化し、亡き人はそこに眠ると信じられた「近世」を経て、「現代」は死者が生者の記憶の中だけに生きる時代であり、霊魂観念は稀薄化して久しいと佐藤 (2008) は言う。さらに、故人の幸福や安寧は死者儀礼に規定されると信じられたのは「近世」であるとして、「現代」はそうでないことを示唆している（佐藤, 2015）。

つまり、人びとがなぜ墓参やお供えをするのかといえ、かつては亡き人の霊魂を想定していたからだとしても、現代はそうではなく、いま我々が行っている墓参やお供えは形骸化した習慣に過ぎないというのがこの立場の理解であろう。

本研究の目的

以上の議論をふまえて本研究は、霊魂観念が供養をもたらしているのかどうかを検討する。具体的には、「亡き人の魂は存続している」という心象が供養（墓参とお供え）の手厚さに影響するのか否か、さらに、波平 (1990a) が指摘するように、「亡き人は供養を必要としている」という認知が上記を媒介するのか否かを検討する。

3 事故・事件死、災害死、自死の場合、お供えは落命場所でもしばしば行われる。

4 「信仰」には信じていることを自覚しているというニュアンスがある。本研究は、人びとが漠然と思い描く、必ずしも自覚されないイメージという意味で「心象」という語を用いる。

方 法

手続きと回答者

2022年8月初旬、インターネット調査会社のモニターのうち、大切な人と死別経験がある人を対象に計2回のウェブ調査を行った⁵。本研究は、第2回目の調査データ(332名)のうち、故人が回答者の家族・親族である283名(男性163名、女性120名、平均年齢58.98歳、 $SD = 17.15$)を対象とする。

調査内容

大切な故人への気持ちを尋ねる調査であることなどを明記し、性別、年齢などを尋ねた上で、以下の質問を行った。

死別の状況 死別時の回答者の年齢、故人との関係、死因を尋ねた。調査時から死別時の年齢を差し引いた平均経過年数は15.33年($SD = 13.03$)であった。回答者からみた故人との関係は、母89名、父78名、配偶者37名、祖母36名、祖父25名、兄弟8名、姉妹7名、子ども3名であった。死因の内訳は、病気197名、老衰51名、交通事故・犯罪被害・災害被害・自死以外の不慮の事故13名、自死10名であった(その他9名、無回答3名)。

靈魂観念 「大切な故人に対するあなたのイメージにもっともあてはまるものを選んでください」というリード文に続けて、「肉体は消えても故人の魂は残る」、「目には見えないが故人の靈魂は存在すると思う」、「故人の靈魂は生前の人柄や個性などをとどめている」の3項目を尋ねた($\alpha = .91$)。項目は、死後観尺度(白岩・堀江, 2020)の靈魂因子を参考に自作した(「まったくそう思わない(1)」-「どちらともいえない(3)」-「とてもそう思う(5)」の5件法)。

供養の必要性 「あなたの大切な故人について、お気持ち、考えにもっともあてはまるものを選んでください」というリード文に続けて、「供養することで、故人は平穏を得ることができる」、「供養されなかったら、故人は悲しんだり道に迷ったりするだろう」、「故人の心残りを

できるだけ取り除いてあげるのは、残された者の務めだと思う」、「故人の供養をまったくしないのは不義理だと思う」、「故人の供養を一切やらなければ不安になるだろう」の5項目を自作し尋ねた($\alpha = .89$)。上記と同じ5件法である。

墓参・お供え 「あなたの行動としてもっともあてはまるものを選んでください。新型コロナウイルス感染症の影響で現在できなくなっている場合は、「コロナ禍以前はどうだったか」をお答えください」というリード文に続けて、日頃の宗教活動のうち慰霊的行動を測定する4項目(金児, 1994)中3項目⁶を2項目に改変して使用した。具体的には、「墓参りをしている」を「故人の墓参りをしている」に、「仏壇にお花やお仏飯をそなえる」と「神棚にお花や水をそなえる」を「故人の祭壇(仏壇や祖霊舎など)にお花や水、食べ物などをそなえている」とした($r = .47, p < .001$)。5件法(「まったく行っていない(1)」-「どちらともいえない(3)」-「とても行っている(5)」)で測定した。

信仰の有無と内容 「宗教的信仰について、どれがご自分にもっともあてはまると思いますか」と尋ねた。回答は多い順に、「仏教系の信仰」145名(51.24%)、「ない」110名(38.87%)、「神道系の信仰」15名(5.30%)、「キリスト教系の信仰」6名(2.12%)、「その他」2名、無回答5名であった。信仰の有無によって回答者を2群化した(信仰あり168名、信仰なし110名)。

倫理的配慮

あらかじめ調査概要を示し、回答に際して心理的苦痛を感じる可能性があること、そうした事態が予想される場合は回答を控えてほしいこと、途中で回答をやめることも可能である旨を記載した。また、信仰の有無など立ち入った事柄を尋ねる際には「答えたくない」(「無回答」と表記)という選択肢を設定した。調査に先立ち所属機関の倫理審査を受け承認を得た(通知番号22007)。

5 死後世界観尺度を開発・標準化することなどが計2回の調査の一義的な目的であり(白岩, 2023), 第2回調査のサンプルサイズはその目的に沿って決定された。

6 残り1項目は「祖先や亡くなった肉親の霊をまつる」であった。「霊」は靈魂観念と概念的に重複するため当該項目は除外した。

Table 1 各変数の基本統計量と相関係数

	M (SD)			供養の 必要性	墓参・ お供え
	全体	信仰なし	信仰あり		
霊魂観念	3.36 (0.94)	3.08 (0.97)	3.55 (0.86)	.60***	.24***
供養の必要性	3.43 (0.82)	3.17 (0.74)	3.63 (0.78)		.41***
墓参・お供え	3.69 (0.97)	3.54 (1.01)	3.79 (0.94)		

注 *** $p < .001$

結果

基本統計量

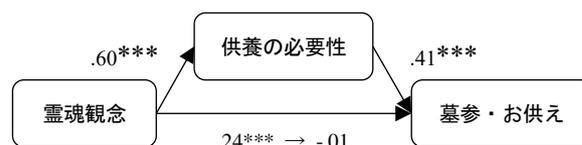
各変数の平均値は、霊魂観念 3.36 ($SD=0.94$), 供養の必要性 3.43 ($SD=0.82$), 墓参・お供え 3.69 ($SD=0.97$)であった。相関係数は概ね高い正の値を示した (Table1)。

以上の変数を信仰の有無で比較したところ、霊魂観念 ($t(276)=4.24, p < .001, d=0.52, 95\%CI [-0.76, -0.28]$), 供養の必要性 ($t(276)=4.86, p < .001, d=0.60, 95\%CI [-0.84, -0.35]$), 墓参・お供え ($t(276)=2.15, p=.016, d=0.26, 95\%CI [-0.51, -0.02]$)と、すべての変数で有意差が確認された。いずれも有信仰者の値が高かった (Table1)。

媒介過程の検証

霊魂観念が墓参・お供えに及ぼす影響と、供養の必要性の媒介効果を検証した⁷。はじめに予備的な分析としてパス解析を行い、上記に霊魂観念から墓参・お供えへの直接パスも加えたモデルを信仰の有無別に検討した。分析には AMOS (IBM 社) を使用した。その結果、霊魂観念から供養の必要性 (.51/.50, $ps < .001$) を媒介して墓参・お供えに至るパス (.34/.65, $p=.005, p < .001$) が、信仰なし/あり群ともに有意となった (各モデルの適合度は $\chi^2(1) = 0.026/0.226, ps = .873/.634, NFI = 1.000/.998, TLI = 1.043/1.020, CFI = 1.000/1.000, RMSEA = .000/.000$)。霊魂観念から墓参・お供えに至る直接パスは有意でなかった。信仰の有無による違いが確認されなかったため、両群を統合して再度同様の検討を行った。霊魂観念から供養の必要性 (.52, $p < .001$) を介して墓参・お供えに至るパス (.51, $p < .001$)

Figure 2 媒介分析の結果



注 *** $p < .001$

が依然として有意であった。モデルの適合度は $\chi^2(1) = 0.060, p = .806, NFI = 1.000, TLI = 1.016, CFI = 1.000, RMSEA = .000$ であった。

以上の結果にもとづき媒介分析を行った。分析では HAD (清水, 2016) を使用した。ブートストラップ法 (標本数: 10,000, 標本生成法: ノンパラメトリック, 信頼区間推定法: バイアス修正法) による間接効果の有意性検定を行ったところ、間接効果は有意であり ($\beta = .25, SE = 0.05, z = 4.79, p < .001, 99\%CI [0.14, 0.42]$), 完全媒介が認められた (Figure2)。

考察

本研究は、大切な人と死別した遺族を対象に調査を行い、次の二点を明らかにした。

第一に、霊魂観念、すなわち「亡き人の霊魂は存在する」という心象は、供養の必要性を介して墓参やお供えを手厚くする。これは信仰の有無によらなかった。つまり、自覚的な信仰がある人だけでなく、信仰がないと答えた人でも同様の過程が確認された。亡き人の墓参・お供えという遺族の行為は霊魂観念によってもたらされ、促されていること、この過程は普遍性をもつことが明らかになった。

本結果が示したのは必ずしも自明の事柄ではない。明治維新以後、迷信や習俗を排し、「科学的」思考を是とする風潮が醸成され、そのための施策が行われてきた (立花, 2012)。小泉八雲の日本名で知られる Hearn (1984 池田訳 2000) は、習俗・迷信を侮蔑する趨勢が明治期の知識人を中心に広がっていく様子を記録している。昭和期には脱迷信・習俗のための教育が

7 霊魂観念、供養の必要性、墓参・お供えと経過年数の関係は、 $r = -.14 (p = .016), r = -.14 (p = .024), r = -.04 (p = .488)$ と一部で弱い負の相関がみられた。また故人との関係 (配偶者/父母/祖父母/兄弟姉妹) で比較すると、墓参・お供えで兄弟姉妹 ($n = 15, M = 2.63, SD = 0.88$) と他 3 群 ($M = 3.91, SD = 1.10 : M = 3.77, SD = 0.95 : M = 3.59, SD = 0.82$) に有意差がみられたが、霊魂観念および供養の必要性で差はみられなかった。死因 (病気/老衰/それ以外) も同様であった。死別の状況ごとの顕著な特徴は確認されなかったため、これらは込みで分析した。

国を挙げて実施された時期もある (金児, 1991)。かつての民間信仰は稀薄化し、その影響力は弱化するに至ったと考えるのは必然であり、霊魂観念は社会的受容と機能を失ったとする一部の指摘 (岡本, 2020 ; 佐藤, 2008, 2015) もそうした経緯をふまえている。

一方で、人びとは霊魂観念を今も内在化しており、この観念ゆえに死者儀礼を行っている—そうした内的過程は自覚されにくい—という指摘も行われてきた (波平, 1990a, 1990b)。少なくとも死者が大切な人である場合、この考察は妥当であり、霊魂観念は確かに人びとの行動を規定していること、墓参やお供えは必ずしも形骸化した習慣ではなく、亡き人の霊魂に思いを致し、その幸福や安寧を願う遺族の心情がもたらす行為であることを本結果は明らかにした。

第二に、霊魂観念から供養の必要性を介して墓参・お供えに至るプロセスは信仰の有無によらなかったが、この3変数すべてで有信仰者の値が高くなった。つまり、信仰があると回答した人は、故人の霊魂の存在をより肯定し、故人は供養を必要としていると考え、実際に手厚い供養 (墓参・お供え) を行っていた⁸。有信仰者の86.31%が仏教系の信仰者であったため、上記の傾向は主として仏教系信仰者の特徴とみなすべきだろう。供養が仏教行事であることに照らせば当然の結果と言えるかもしれない。

仏教はもともと霊魂という概念を、少なくとも正統教義としては積極的に認めていない⁹ (山折, 2002)。霊魂観念は仏教の渡来前から日本にあった民間信仰であり、仏教はそうした信仰を儀礼に取り込んでいくことで、正統教義 (創唱宗教) とは異なる独自の死者儀礼 (自然宗教) を発展させていった (阿満, 2008 ; 五来, 1994 ; 原田, 2020 ; 圭室, 1963 ; 梅原, 1993)。大切な亡き人の幸福や安寧を確かなものにしたという遺族のニーズを、自然宗教としての仏

教が充足するとともに、そうしたニーズを維持してきた相互依存関係の一端を読み取ることができる。

臨床心理学者の河合 (2021) は、現代の死者儀礼が、形式的であるように見えて実は「死者が生者とともにある暮らし」を下支えしているのではないかと述べている。その上で、このことが日本人の生活に安定感をもたらしている可能性に触れている。「死者が生者とともにある」ことは、大切な故人を失ったのちの遺族の人生を何かしらのかたちで支えているのかもしれない。実際、霊魂を信じる人ほど健康・幸福だという報告もある (Carr & Sharp, 2013 ; 寺沢・横山, 2014)。日本の場合、霊魂観念に加えて、供養という「務め」を果たしていることが心身の健康に影響を及ぼしうる。この点を検討することが今後の課題と言えるだろう。

本研究の限界は、大切な人との死別経験者を対象としたために、回答者が高年層に集中したことにある。とくにシニアになるほど霊魂観念は否定されるという知見に依拠するならば (白岩・堀江, 2020)、本研究で得た平均値は普遍的なものとは言いがたい。また、仏教系以外の信仰者のサンプルを増やすことで、有信仰者同士の比較を行うことも必要だろう。

利益相反

開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

相澤 秀生 (2016). 日本の中で「信仰」に生きる人々——あなたの知らない世界?—— 松島 公望・川島 大輔・西脇 良 (編著) 宗教を心理学する——データから見えてくる日本人の宗教性—— (pp. 61-82) 誠信書房

8 仏教系、神道系、キリスト教系と信仰なしで比較すると、霊魂観念では仏教系 ($M=3.52, SD=0.84$) に加えて神道系 ($M=3.76, SD=0.90$) が信仰なし群 ($M=3.08, SD=0.97$) より有意に高かった。また有意差は検出されなかったが、キリスト教系 ($M=3.44, SD=1.34$) も高い値となった。しかし、供養の必要性和墓参・お供えでは、信仰なし群 ($M=3.17, SD=0.74$; $M=3.54, SD=1.01$) より有意に高い値を示したのは仏教系のみであった ($M=3.62, SD=0.75$; $M=3.85, SD=0.92$)。

9 とくに、浄土真宗 (本願寺派)、真宗 (大谷派)、曹洞宗、臨済宗 (妙心寺派)、創価学会などの教団は、肉体から離れた実態としての霊魂を否定している (堀江, 2015)。こうした教義と信徒の心象のずれは、「いのち」など霊魂と似た語を教団が用いることで表面化しにくくなっているという。

- 阿満 利磨 (2008). 死生の位相転換——鎮魂慰霊を超えて—— 熊野 純彦・下田 正弘 (編) 死生学 2——死と他界が照らす生—— (pp. 225-243) 東京大学出版会
- Carr, D. & Sharp, S. (2013). Do afterlife beliefs affect psychological adjustment to late-life spousal loss? *Journals of Gerontology, Series B——Psychological Sciences and Social Sciences*, 69, 103–112.
- 藤井 正雄 (2005). 供養 新谷 尚紀・関沢 まゆみ (編) 民俗小事典 死と葬送 (pp. 272-273) 吉川弘文館
- 五来 重 (1994). 日本人の死生観——民族の心のあり方をさぐる—— 角川書店
- 原田 正俊 (2020). 死者と冥界 1 葬式仏教の展開——古代・中世を中心に—— 伊藤 聡・佐藤 文子 (編) 日本宗教史 5——日本宗教の信仰世界—— (pp. 146-177) 吉川弘文館
- Hearn, L. P. (1894). *Glimpses of unfamiliar Japan*. Houghton Mifflin and Company. (ハーン, L. P. 池田 雅之 (訳) (2000). 新編 日本の面影 角川書店)
- 堀江 宗正 (2015). 霊といのち——現代日本仏教における霊魂観と生命主義—— 死生学・応用倫理研究, 20, 195-254.
- 岩田 重則 (2018). 日本鎮魂考——歴史と民俗の現場から—— 青土社
- 金児 曉嗣 (1991). 宗教性と死の恐れ 黒岩 卓夫 (編) 宗教学と医療 (pp. 175-208) 弘文堂
- 金児 曉嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究・大阪市立大学文学部紀要, 46, 1-28.
- 河合 隼雄 (2021). 宗教と科学の接点 岩波書店
- 小松 清 (2005). 墓参り 新谷 尚紀・関沢 まゆみ (編) 民俗小事典 死と葬送 (pp. 193-194) 吉川弘文館
- 波平 恵美子 (1990a). 病と死の文化——現代医療の人類学—— 朝日新聞社
- 波平 恵美子 (1990b). 脳死・臓器移植・がん告知——死と医療の人類学—— 福武書店
- 波平 恵美子 (2004) 日本人の死のかたち—— 伝統儀礼から靖国まで—— 朝日新聞社
- 岡本 亮輔 (2020). 正月やお盆の行事とはなんなのか 岩田 文昭・碧海 寿広 (編著) 知っておきたい日本の宗教 (pp. 42-49) ミネルヴァ書房
- 佐藤 弘夫 (2008). 死者のゆくえ 岩田書院
- 佐藤 弘夫 (2015). 記憶される死者 忘却される死者 東洋英和女学院大学紀要——死生学年報——, 11, 53-69.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 新谷 尚紀 (1992). 日本人の葬儀 紀伊国屋書店
- 新谷 尚紀 (2009). お葬式——死と慰霊の日本史—— 吉川弘文館
- 白岩 祐子 (2023). 遺族の死後世界観と解剖や臓器提供に対する態度——死後世界観尺度 (2人称) を用いた検討—— 心理学研究, 94, 413-422.
- 白岩 祐子・堀江 宗正 (2020). 日本人の死後観——その類型と性差・年代差の検討—— 死生学・応用倫理研究, 25, 32-54.
- 立花 隆 (2012). 天皇と東大 I——大日本帝国の誕生—— 文藝春秋
- 圭室 諦成 (1963). 葬式仏教 大法輪閣
- 田中 久夫 (2005). 年忌 新谷 尚紀・関沢 まゆみ (編) 民俗小事典 死と葬送 (pp. 275) 吉川弘文館
- 寺沢 重法・横山 忠範 (2014). 「死後の世界を信じること」と幸福感——JGSS-2008 の分析—— 宗教と社会貢献 4, 1-25.
- 梅原 猛 (1993). 日本人の「あの世」観 中央公論新社
- 山折 哲雄 (2002). 死の民俗学——日本人の死生観と葬送儀礼—— 岩波書店
- 渡部 美穂子・金児 曉嗣 (2004). 都市は人の心と社会を疲弊させるか? 都市文化研究, 3, 97-117.

本研究の目的は、大切な故人の霊魂に対する遺族の心象 (霊魂観念) と供養 (墓参・お供え) の手厚さの関連、および「亡き人は供養を必要としている」という認知の媒介効果を検討することであった。調査会社にパネル登録する 283 名 (うち男性 163 名, 平均年齢 58.98 歳, $SD = 17.15$) がオンライン調査に協力した。媒介分析の結果、「故人の魂

白岩 (2024). 宗教／スピリチュアリティ心理学研究, 2(1), 7-13.

は存在する」という心象が、供養の必要性を媒介して墓参・お供えに至るプロセスが確認され、霊魂観念は人びとの行動を規定していることが明らかになった。今後の課題として、霊魂観念と供養の実施状況が遺族の心の健康や幸福度に及ぼす効果を検討する必要性が議論された。

— 2023.08.01 受稿, 2023.10.17 受理 —